「御国が来ますように。」

ルカ11：1～4

**初めに　主の祈りとは何か**

**さて、イエスはある所で祈っておられた。その祈りが終わると、弟子たちのひとりが、イエスに言った。「主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」**

わたしはいつも、父にこのように祈っている。だから、あなたもわたしに合わせて一緒に祈ってごらん。そうしたらあなたにも、祈るということがどういうことなのか、わかるようになる。そのように教えてくださったのが「主の祈り」である。

**「御国が来る」ということはどういう意味か？**

御国」と訳されているギリシア語basileiaは「王」を意味するbasileus（バシレウス）の派生語です。つまり「御国が来る」とは、この地上に神による王国が実現するということ。

「私たちが地上を去って御国に入れますように」ということではない。

聖書が記している、私たちの希望とは、肉体の復活であり、新天新地において、神が人とともに住まわれること。

**死者の復活のことを、私たちは受け入れづらい。**

使徒行伝の中で、パウロがアテネでギリシア人に伝道した時のことが書かれています。

はじめは興味深く彼の話を聞いていたギリシア人たちは、パウロが復活のことに言及したとたんに態度を一変させます。使徒の働き17章32節には、こう書かれています。

**死人のよみがえりのことを聞くと、ある者たちはあざ笑い、またある者たちは、「この事については、いずれまた聞くことにする」と言った。**

彼らにとって「肉体の復活」が「福音（良い知らせ）」であるなどという教えはナンセンス以外の何物でもなかったのです。このようなギリシア的な世界観に対して、聖書が教える世界観は異なっています。わたしたちもまら、ギリシア思想の影響を受けている。

**聖書の教える最終的な希望**

聖書の教える最終的な希望は、私たちが天に昇っていくという上向きの運動ではなく、神が地上に降りてこられるという下向きの運動であることを覚える必要があります。

ですから、主の祈りを祈る時、私たちはこの地上を脱出して別世界に逃避することを願うのではなく、神の支配がこの地上に実現することを求めているのです。

**「主の祈り」とはまさに、「時は満ちた、神の国は近づいた。」（マルコ1章15節）**というイエスの宣教の言葉を信じた者たちが祈る、応答の祈りです。この祈りを日々祈ることは、イエスが始められた福音宣教のわざを継続していくことに他ならないのです。

**神の国はすでに訪れ、成長を始めている。**

ルカ17章20－21節をみると、イエスは、神の国は当時のユダヤ人たちが信じていたように誰の目にも明らかな仕方で訪れるのではなく、ひそやかに訪れると語られた。つまり、神の国は人々の間に既に存在し、拡大しているというのです。

**聖書は、首尾一貫したストーリーラインを持つ一つの物語**

物語においては話がどのような展開を経てどういう結末にいたるかが重要であり、同じようなできごとがただ繰り返されていくのではありません。神の国は何もない空き地に到来するわけではありません。

**現在の地上は神以外の存在によって支配され、神の意志とは異なる意志によって動かされています。**

主の祈りの中でイエスが弟子たちに、「御国を来たらせたまえ。みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ。」と祈るように教えられたのは何故でしょうか。それは、現時点では神の支配はこの地上を未だ完全におおっておらず、神のみこころが完全になっていないからことなのです。実際には、神の国は、神に敵対する存在が支配するもう一つの王国に侵攻してくるのです。

**神は世の終わりに地上の歴史に決定的な介入を行われ、その王国をご自分のものとして掌握される。**

黙示録には、世の終わりに神ご自身が王として支配するだけでなく、神の民たちも王として、この世界を支配するのだと書かれているのです。

これはつまり、神の王としての支配の働きにクリスチャンが参加させていただくことを意味しています。

神の国における「支配」とは、この世の王国のような暴力と強制によるのではなく、愛と謙遜にもとづく奉仕によるものです。

クリスチャンの究極的な希望は、神が王として世界のすべてを支配し、神の民もその支配に参加させていただくことです。

新約聖書が記しているもう一つの終末的ビジョンは、三位一体の神が永遠の昔から持っておられる愛の交わりの中に、神の民が加えて頂くこにあるのです。